

## 〈作品紹介〉

# 「うつほ物語絵巻」(田万コレクション)

## 知 念 理

### はじめに

『うつほ物語』は平安時代中期に成立したとみられる初の長編物語である。『源氏物語』の「絵合」巻には「竹取の翁」と「宇津保の俊蔭」を比べて評する場面があり、その絵画化が早くから行われていたことがわかる。ところが伝本は非常に少ない。奈良絵本と称される素朴な様式の絵入り冊子本と、豪華な仕立ての絵巻作品とが合わせて十余点確認されるほかに、六曲一双の中屏風が近年の展覧会で紹介された程度である<sup>(1)</sup>。しかも江戸時代をさかのぼるものではなく、すべて首巻「俊蔭」だけを単独で絵画化する作品であることなど、中・近世の源氏絵や伊勢絵とは制作・受容の状況が大きく異なる物語絵である。

大阪市立美術館収蔵の田万コレクションには、三巻・二十八図からなる「うつほ物語絵巻」(以下、大正本という)がある。数少ない「うつほ絵」の全体像を把握するには貴重な一本と考えられるが、大正本の存在を認知した論考は未だみられない<sup>(2)</sup>。筆者は近時刊行された図録に、本作に関する簡単な解説と一部の図版を掲載したが<sup>(3)</sup>、

本稿では三巻に含まれるすべての絵を掲載し、場面比定、選択場面の諸本異同、表現的特徴などについての検討を加えておきたい。

### 一 場面比定

大正本の基本データは以下の通りである。

|          |          |           |
|----------|----------|-----------|
| (巻一) 絵九図 | 縦三三・五 cm | 横四七四・七 cm |
| (巻二) 絵十図 | 〃        | 横五六三・七 cm |
| (巻三) 絵九図 | 〃        | 横五二六・二 cm |

外題は「うつほ物語一(二／三)」<sup>(4)</sup>、表紙は二重蔓唐草金欄、見返しは布目金箔とする。巻末の軸付は金泥草花下絵の料紙によるが、各巻とも紙幅はわずかに数センチしかなく不自然な装丁である。これは本三巻中に詞書が一段もなく、計二十八の絵だけがまったく順不同に継がれている不可解な現状と関係しよう。

つまり、当初予定(依頼)した詞書の調製が実現しなかったため、孤立した絵のみが卷子に仕立てられ伝来した、あるいは、制作当初は絵・詞とも完備していたが、後年の修理、所蔵者の異動などにより解装され、詞書を逸失(または故意に分離)して再表装された、

などの状況が推測される。

いまひとまず、残された絵の場面比定とともに各図の本来あるべき配置修正を検討すると、後掲【図1】～【図28】のようになるだろう。各図について、現状の巻次と配列を「」内に示し、場面の概略を記す。

【図1】〔卷三／四〕 学才に優れた清原俊蔭は十六歳で遣唐使に任命され、悲嘆に暮れる両親と別れて唐へ渡る。

【図2】〔卷三／九〕 俊蔭が乗った船は難破して波斯国に漂着するが、観音菩薩の加護により白馬が出現する。

【図3】〔卷三／八〕 白馬によって俊蔭は梅檀の木陰で琴を弾く三人の仙人のもとへ運ばれ、琴の奏法を学ぶ。

【図4】〔卷三／七〕 俊蔭は天人が植えた木を守る阿修羅に出会い、伐木の一部を譲り受けて三十の琴を得る。

【図5】〔卷三／六〕 俊蔭が琴を弾く花園に天人が降下し、琴により繁栄する一族の祖となることを予言する。

【図6】〔卷三／五〕 俊蔭はさらに西へ赴き、予言を受けた天人の子らである七仙人に出会い、琴の奏法を学ぶ。

【図7】〔卷三／三〕 俊蔭と七仙人が弾く琴の音が仏の国まで響き渡り、仏が現われて過去世からの因果を説く。

【図8】〔卷一／二〕 帰国を決意した俊蔭は七仙人に別れを告げ、波斯国に戻ってその帝らに琴を献上する。

【図9】〔卷一／五〕 二十三年振りに帰国した俊蔭は東宮学士に任ぜられ、持ち帰った琴を帝らに献上する。

【図10】〔卷一／二〕 病に倒れた俊蔭は、秘琴「南風」、「波斯風」

の霊験と継承を幼い娘に遺言して亡くなる。

【図11】〔卷二／四〕 若小君（のち藤原兼雅）は父の太政大臣の賀茂詣に随行し、俊蔭女を垣間見る。

【図12】〔卷二／三〕 若小君は俊蔭女が忘れられず、賀茂詣の帰途、独りで荒れ屋敷を訪れ、その夜、女と契る。

【図13】〔卷一／九〕 若小君は俊蔭女と契った夜の失踪を両親から厳しくがめられ、以後、行動を監視される。

【図14】〔卷一／六〕 亡くなった乳母に仕えていた老女が俊蔭女の懷妊に気付き、娘の身を案じて励ます。

【図15】〔卷二／五〕 亡くなった乳母に仕えていた老女の世話で、俊蔭女は男子（のち仲忠）を出産する。

【図16】〔卷一／八〕 世話をする老女も他界し、まだ五歳の俊蔭女の子は魚を釣って食料を調達し、母を養う。

【図17】〔卷一／三〕 貧窮を極めた俊蔭女母子は、熊の親子から大きな木のうつほを譲り受け、移り住む。

【図18】〔卷二／七〕 俊蔭女はその子に琴を伝授するようになり、その音に感動した動物たちが集まってくる。

【図19】〔卷二／六〕 俊蔭女母子が弾く琴の音にひかれ、猿たちが水や木の実などの食料を運んでくる。

【図20】〔卷二／十〕 北野への行幸に随行した藤原兼雅（先の若小君）は、不思議な琴の音を尋ねて山に入る。

【図21】〔卷二／九〕 いくつもの嶺を越えた山中で、藤原兼雅は俊蔭女の子と邂逅し、山ごもりの境遇を聞く。

【図22】〔卷一／四〕 藤原兼雅が俊蔭女母子が暮らすうつほを再訪し、子の将来のため帰京するように説得する。

【図23】〔卷二／八〕 俊蔭女母子は藤原兼雅の迎えを受けてうつほを後にし、兼雅の三条堀川邸に向かう。

【図24】〔卷三／二〕 藤原兼雅は俊蔭女母子を三条堀川邸に迎え取り、多くの従者を集めて手厚く世話させる。

【図25】〔卷三／二〕 十八歳の仲忠（俊蔭女の子）は五節の試楽に帝の御前で「せた風」を弾き、絶賛される。

【図26】〔卷一／七〕 各地の莊園から各種織物が届けられ、相撲の還饗の褒美に配る衣類の調達が相談される。

【図27】〔卷二／二〕 三条堀川邸で相撲の還饗が催される日、座席のしつらいが整い、諸人が着座する。

【図28】〔卷二／二〕 相撲の還饗で仲忠が素晴らしい琴の演奏を披露し、主客こぞって管弦に興じる。

## 二 場面選択の諸本異同

「うつほ絵」の絵巻作品は別掲〈表〉のように六本の存在が確認できる。<sup>(4)</sup> 諸本のうち、②国文研本、③九大本、④九曜文庫本についてはそれぞれ全巻の絵を容易に確認できることから、<sup>(5)</sup> これら三本を比較対象として、①大美本からみた場面選択の異同について検討した。「●」で一致を示したが、あくまで場面選択の点での一致という意味で、絵は各本独自の図様による。

①大美本には二十八の絵があつて②国文研本とともに最多。大美本だけにしか含まれない場面として【図2】、【図20】、【図27】があるが、俊蔭が西方から帰国後、自邸で娘に対して琴の奏法を伝授する場面は①大美本にだけ含まれない。②国文研本、③九大本、④九曜文庫本には、それぞれに独自の場面選択がな若干含まれている

ことから、①大美本には当初さらに絵があつた可能性も否定はできない。仮に詞書を完備した絵巻であつたとしてそのボリュームを勘案すると、②国文研本、③九大本と同様、当初は五巻の仕立てであつたかと推測される。

また、【図5】、【図6】の異同を「○」で示したのには少し説明が要る。①大美本【図5】では、浄土宮殿らしき場所で俊蔭が天人と対面し予言を受ける情景が描かれる。対するに、②国文研本、④九曜文庫本では、花下弾琴する俊蔭の頭上に降下する乗雲の七天人が描かれ、テキストとの対応がより直接的である。

②国文研本、④九曜文庫本のこの図様は、①大美本では続く【図6】の場面に援用されているが、乗雲する七人は童子形に変わっている。②国文研本、④九曜文庫本で描かれるのと同じ七天人ではないかと、非常に紛らわしい。しかし続く【図7】には、この七童子が来迎する仏（来迎雲のみで仏の姿は描かれないが）を仰ぎ、俊蔭とともに合掌する場面が描かれることから、【図6】は、【図5】に描かれた天人の子として登場する七仙人らとの出会いを意図した絵と見る必要がある。

この七仙人は、②国文研本、③九大本、④九曜文庫本では山中で出会う老仙人の姿で描かれており、やはりテキストとの対応が直接的である。①大美本【図5】、【図6】の場面比定にはこうした図様の翻案、飛躍にやや注意を要する。

もう一点注意すべきは【図26】である。②国文研本では巻五の第三図にあたる場面である。赤澤真理氏は、相撲の還饗の当日、饗応の支度が整った座席に諸人が着座した場面として同図を解されている。<sup>(6)</sup> しかしながら私見では、当該場面はその前段、相撲の還饗で与

え配る衣類の用意について、藤原兼雅が俊蔭女に指示を与えた後に続く、次のような件に関わる絵であると解される。

国々の荘より、こう絹、布など持てまゐれり。御いそぎの料にとて、綾、薄物、縑絹など多くたてまつれたれば、御匣殿する人、御前にて計らひ定む。染め草、何くれのこと。(後略)

②国文研本・巻五の第三図には、畳、縁に色とりどりの織物類が積み上げられた机が並べられている。相撲の還饗の褒美に仕立てるため、あちこちの荘園から届けられた綾や各種の絹で、その調達を兼雅らが相談する情景と解されるのであって、座席に着座した諸人の酒食のためのしつらえではなからう。赤澤氏が想定する場面の絵は②国文研本には含まれず、①大美女本の【図27】をそれに比定するのが適切である。

### 三 表現的特徴

次に、①大美女本を特徴づける表現についていくつか確認しておきたいが、まず右でふれた【図26】に戻る。

座敷中央に織物をのせた机を一基ぼつと描くだけの描写は、②国文研本・巻五の第三図に比較するとあまりにも素っ気ない。【図24】でも畳上には杯をのせた三方が一前あるだけだが、これに対応する②国文研本、③九大本の絵では、畳上に島台や蒔絵重箱といった調度類がしっかり描かれており、やはり対照的である。そして【図27】の広々した畳上は一層空虚に感じられる。飲食関係の調度類が、意図的にかどうかはわからないが一切省略されて描かれておらず、饗応の座席としては精度を欠き、ある意味、未完成ともいえる描写となっている。

【図15】は俊蔭女の出産場面である。②国文研本、③九大本では朽ち荒れた屋敷の壁、縁、建具などを描写しているが、①大美女本では庭の片隅に柴垣を添える程度で、俊蔭没後の屋敷の荒廃にはほとんど注意が払われていない。また伐木の一部を俊蔭に譲る阿修羅【図4】は夫婦と子供の家族のようで、鬼神形で描かれる。②国文研本は五体の鬼、③九大本は三体の天部形、④九曜文庫本は上半身裸の人間？三人となっており、各本によりその描写は大きく異なる。

【図17／18／19／21／22】の計五場面で、俊蔭女母子が移り住んだうつほ（空洞）が繰り返し描かれる。どれも岩面（土坡）に穿たれた洞窟のような形状を呈する。他三作例では、複数の樹木をねじり合わせたような大木の根元を空洞とし、やはり①大美女本の図様にはテキストからの飛躍がみられる。

この存在感ある土坡の描写は屋台、池水、松樹とともに、①大美女本のすべての絵でその骨格を支える主要なパーツとなっている。こぶ状の円いふくらみや、ヘラの先のような鋭角的な突起を執拗に重ねて輪郭を象り、そこに緑青の具の点描（苔）を沿わせて重層的な岩面を形成する表現からは、他本にはない強いアクが感じとれよう。また岩面の彩色はやや濃淡ある緑青の具を主調とし、金泥によるハイライトを交えて陰影感を与える。画中の地面には金泥をはき、天地の霞形には金砂子、切箔をまく。屋台内の障壁画、鮮やかな人物の着衣にも豊富に金泥が用いられ、重量感ある画面空間を作り込んでいる。

なお一点は、俯瞰視点を低くとり、部屋の奥行を十分に見通して、広く、歪みの少ない吹抜屋台を描くことである。割合としては単純な順勝手の水平構図が多いが、物語の終盤には長尺画面を集中させ、

とくに【図27】、【図28】では屋台の構造を複合的に拡大する工夫もみられ、それぞれの屋台内に19人、17人もの多数人物を配する。

一方、②国文研本には屋敷の表と奥を合わせて描いたり、うつほ周辺の山水を連続的に描く長尺画面があるが、吹抜屋台は①大正本より小規模で歪みのある閉じた構図をみせ、屋台内に描かれる人物もさほど多くない。③九大本の絵は総じて、高く、近接した俯瞰視点をもち、屋台を描く構図の固定化が顕著に進む。<sup>(8)</sup>④九曜文庫本は吹抜屋台による描写をわずか一図しか含まない。

## 小結

以上、大阪市立美術館所蔵「うつほ物語絵巻」について、場面比定、選択場面の諸本異同、表現的特徴を検討しつつ作品紹介した。

②国文研本が古活字版第一種、③九大本と④九曜文庫本が万治三年（一六六〇）の絵入版本による詞書をもつこと、③九大本は寛文年間、②国文研本はそれより遅れる近世前期の作とも指摘される。<sup>(9)</sup>①大正本はその詞書を欠くが、婚礼本と思われる極上製本のお伽草子系絵巻の類に属し、十七世紀後半の制作とみてよく、画風的には②九大本に先行してもおかしくはない。

また、その図様や表現にはテキストからの飛躍、翻案も確認された。絵巻だけではなく、京都大学附属図書館所蔵本など、類似した性格の描写を含む冊子本との比較による解釈も不可欠であろう。もって今後の課題とし、さらなる類品の存在など、大方のご教示をお願いするものである。

## 註

1 特別企画展「物語と絵画―文学と美術の出会い」（大和文華館・平成二十一年）出品。狩野派を学んだ絵師の作とされる。宮崎も「物語と絵画―文学と美術の出会い展によせて―宇津保物語図屏風をめぐる―」、「『美のたより』一六七号、平成二十一年。

2 ①赤澤真理「国文学研究資料館蔵「うつほ物語絵巻」に描かれた住空間―九州大学本との比較を中心として―」、「国文学研究資料館紀要」三十八号、平成二十四年。

②安倍素子「奈良絵本絵巻「うつほ物語」について」、「尚綱大学研究紀要」二十八号、平成十七年。

③同前「同前（二）―万治版への影響―」、「同前」二十九号、平成十八年。  
④同前「同前（三）―京大本の「絵柄」をめぐる―」、「尚綱学園研究紀要 A. 人文・社会科学編」五号、平成二十三年。

⑤伊藤禎子「『うつほ物語』と絵」、「うつほ物語大辞典」（勉誠出版、平成二十五年）所収。

⑥田村隆「奈良絵本『うつほ物語』の背景」、「文学」九・四、平成二十年。  
⑦同前「うつほ物語絵巻」作品解説、「新収資料展 物語として歴史―平安から中世へ―」（国文学研究資料館、平成二十三年）所収。

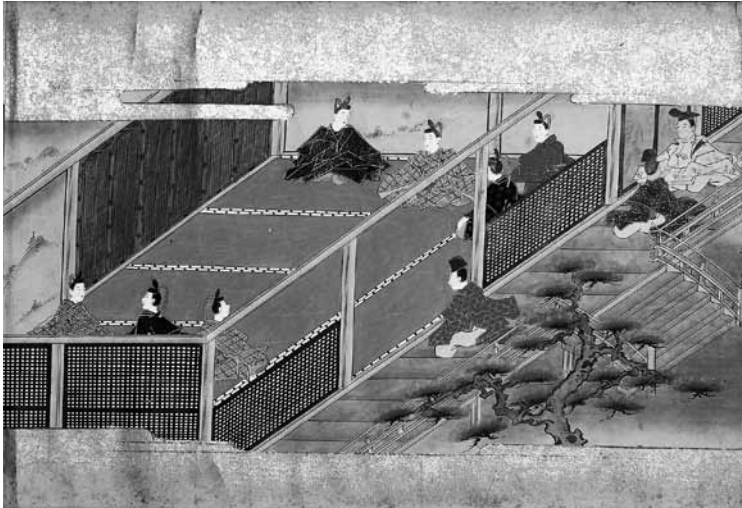
⑧同前「『うつほ物語』享受史における奈良絵本と版本の影響関係についての調査研究」、「二〇〇八―二〇一〇 科学研究費補助金 若手研究 B 研究成果報告書」（科学研究費助成事業データベース、平成二十三年）所収。  
⑨中野幸一編「奈良絵本絵巻集 3・8・別巻 2」（早稲田大学出版部、昭和六十三年）所収、各「うつほ物語 解題」。

3 『大阪市立美術館収蔵作品目録 田万コレクション I 中・近世絵画 日本書跡』（大阪市立美術館、平成二十七年）所収、図版 No. 3056/94。  
4 絵本作例については前掲註 2 の諸論考を参照。さらに管見に入った若干の絵本作例をあげる。

5 海の見える杜美術館蔵「奈良絵貼交屏風」・六曲一隻（元縦長冊子絵二十四枚）

・鶴見大学図書館蔵「宇津保物語残簡」・一卷（元横長冊子）  
・成蹊大学図書館蔵「うつほ物語」・二冊

②国文研本、③九大本は所蔵機関ウェブサイトで全巻のデジタル画像が公開されている。④九曜文庫本は、前掲註 2 ⑨中野『同書 8』に図版収



【図1】〔卷三／四〕

| ★                 | ★                 | ④    | ③         | ②          | ①          | No. | 絵巻作品・所蔵先 | 巻立 | 場面選択異同 |
|-------------------|-------------------|------|-----------|------------|------------|-----|----------|----|--------|
| 天理図書館<br>(西荘文庫旧蔵) | 天理図書館<br>(久原文庫旧蔵) | 九曜文庫 | 九州大学附属図書館 | 国文学研究資料館   | 大阪市立美術館    |     |          |    |        |
| 二卷<br>(残欠)        | 五卷                | 三十一図 | 十八図       | 五卷<br>二十八図 | 三卷<br>二十八図 |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | —         | ●          | 図1         |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | —         | —          | 図2         |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | ●         | ●          | 図3         |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | ●         | ●          | 図4         |     |          |    |        |
|                   |                   | ○    | —         | ○          | 図5         |     |          |    |        |
|                   |                   | ○    | ○         | ○          | 図6         |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | —         | ●          | 図7         |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | ●         | ●          | 図8         |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | ●         | ●          | 図9         |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | —         | ●          | 図10        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | —         | ●          | 図11        |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | ●         | ●          | 図12        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | —         | ●          | 図13        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | —         | —          | 図14        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | ●         | ●          | 図15        |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | ●         | ●          | 図16        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | ●         | ●          | 図17        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | ●         | ●          | 図18        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | ●         | ●          | 図19        |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | —         | —          | 図20        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | —         | ●          | 図21        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | ●         | ●          | 図22        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | —         | ●          | 図23        |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | ●         | ●          | 図24        |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | ●         | ●          | 図25        |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | —         | ●          | 図26        |     |          |    |        |
|                   |                   | —    | —         | —          | 図27        |     |          |    |        |
|                   |                   | ●    | ●         | ●          | 図28        |     |          |    |        |

〈表〉

載される。

6 前掲註2①赤澤「同論文」。

7 『うつほ物語①』（新編日本古典文学全集14、小学館、平成十一年）、一一頁。なお、この件を『うつほ物語』の所々にみられる異質な本文である「絵解」に含める訳注者もある。伊藤禎子氏は当該箇所を含め、絵解本文の物語本文への見直しを論じている。伊藤禎子「『うつほ物語』「絵解」資料」、『学習院大学大学院日本語日本文学』創刊号、平成十七年。同前「『うつほ物語』（絵解）小考」、『学習院大学人文科学論集』十四号、平成十七年。同前「『うつほ物語』の（絵解）」「物語研究」六号、平成十八年。

8 前掲註2①赤澤「同論文」では、②国文研本の長尺画面を、時間と空間の動き（流れ）が示された絵巻的な表現、③九大本の統一的な画面を、

冊子や版本の挿絵に近い固定的な表現と特徴づけている。

9 前掲註2⑥⑦⑧田村「同論文」。

（付記） 本稿をなすにあたり②国文研本を実見する機会に恵まれた。上質の顔料を使用している割に、建築、樹石、群像等、諸モチーフの構築性が弱く、先行作品の丁寧な写しで、十八世紀以降に下る制作との印象をもった。古活字版第一種によるとされる本文、八條宮智仁親王筆の伝（箱書）を考慮するなら、江戸初期にさかのぼる正系絵師による先行作品が存在した可能性がある。絵だけを二時間ほどで一覧した限りのとりとめもないメモであるが、閲覧許可への御礼と合わせ付記しておきたい。



【図2】〔卷三／九〕



【図3】〔卷三／八〕



【図4】〔卷三／七〕



【図5】〔卷三／六〕

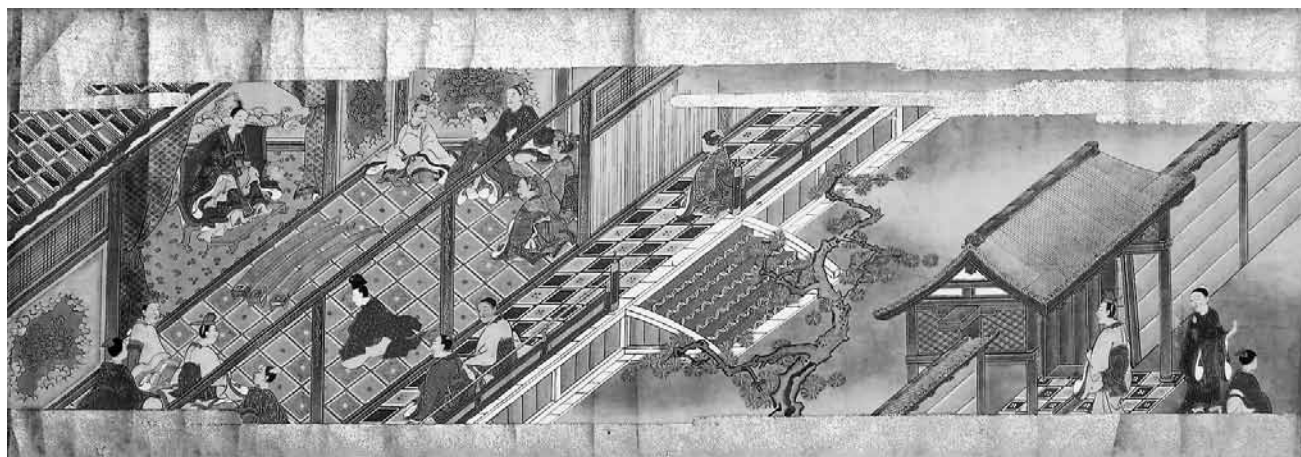


【図6】〔卷三／五〕

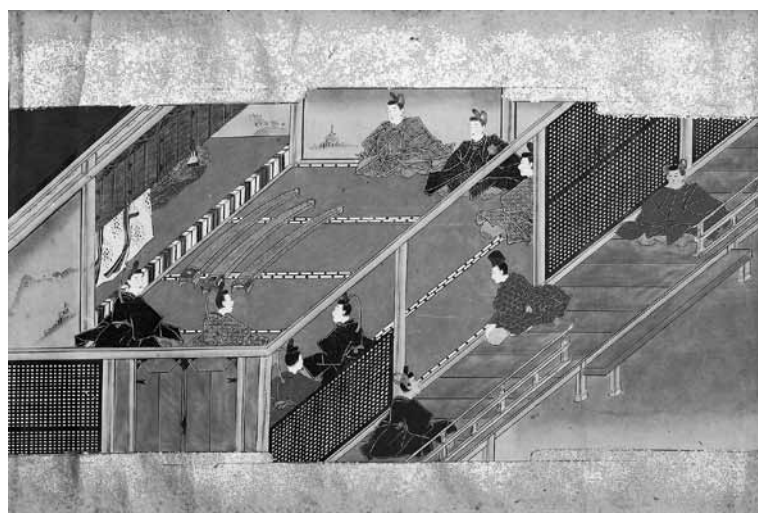


【図7】〔卷三／三〕

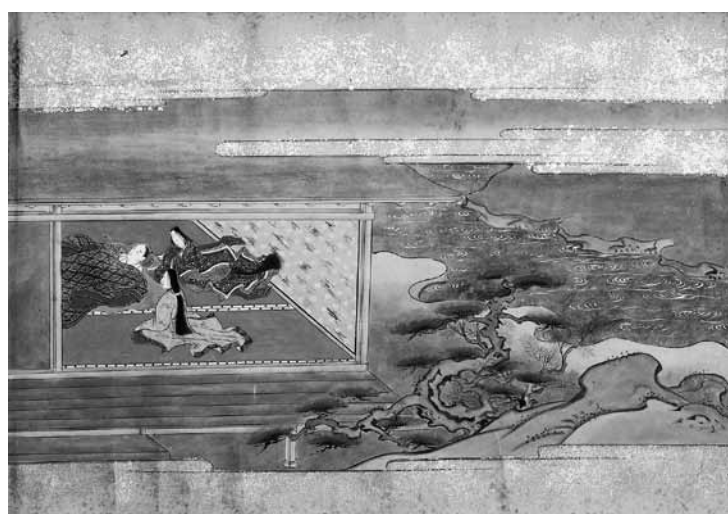




【图8】〔卷一／一〕



【图9】〔卷一／五〕



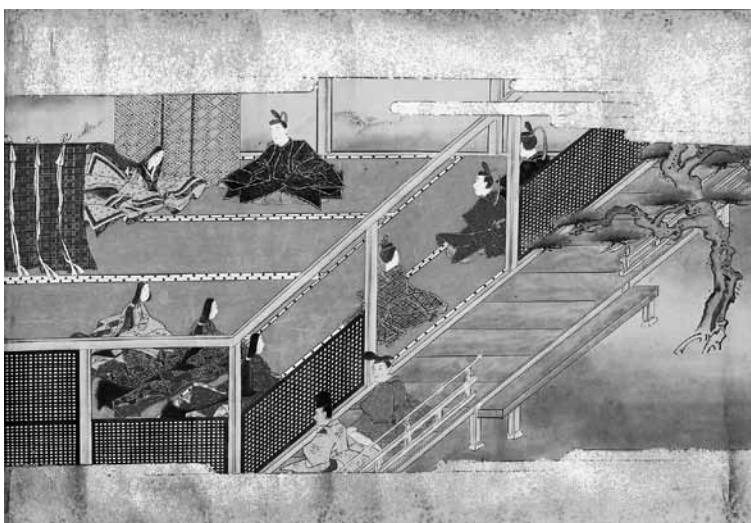
【图10】〔卷一／二〕



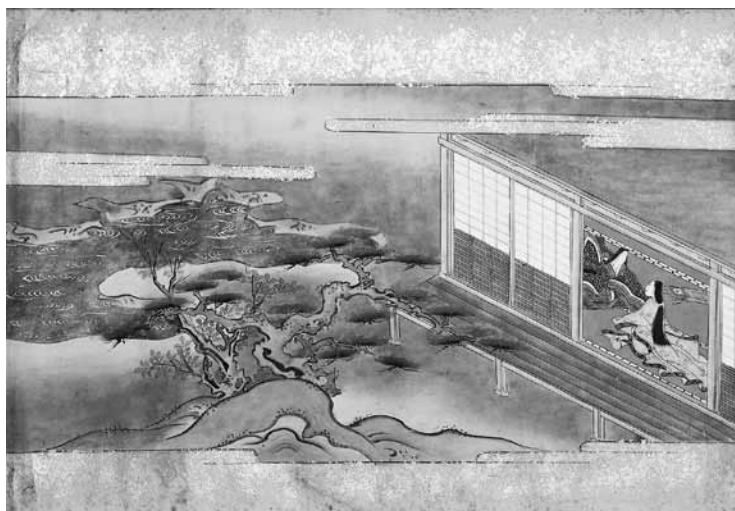
【图11】〔卷二／四〕



【图12】〔卷二／三〕



【图13】〔卷一／九〕



【图14】〔卷一／六〕



【图15】〔卷二／五〕



【图16】〔卷一／八〕



【图17】〔卷一／三〕



【图18】〔卷二／七〕



【图19】〔卷二／六〕



【图20】〔卷二／十〕



【图21】〔卷二／九〕

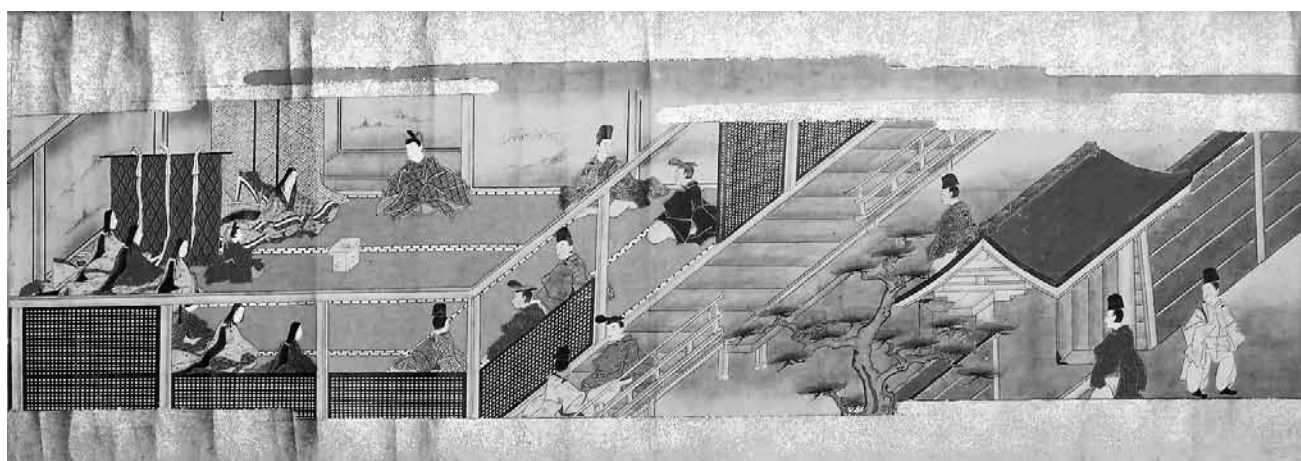


【图22】〔卷一／四〕

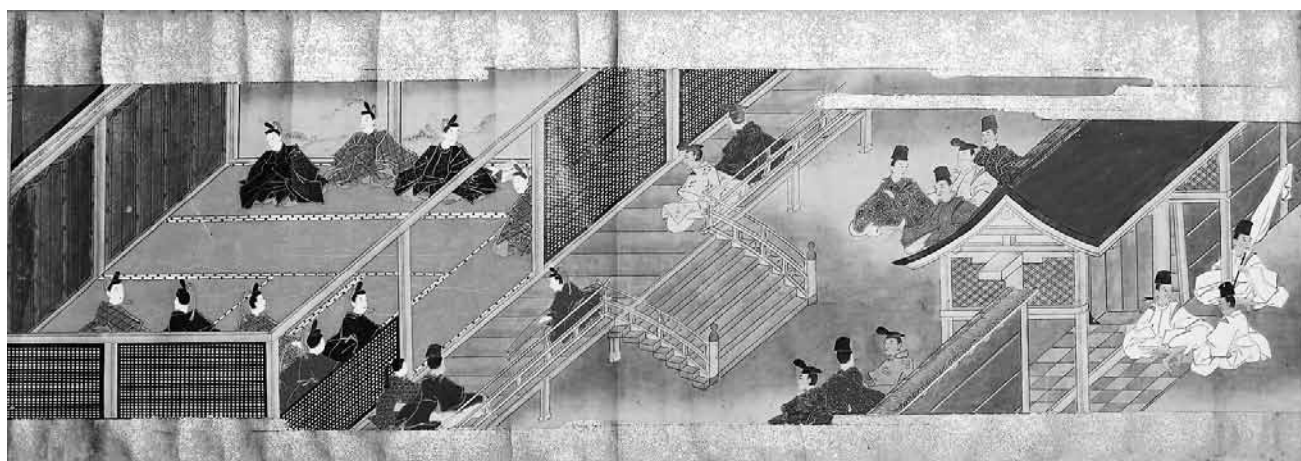




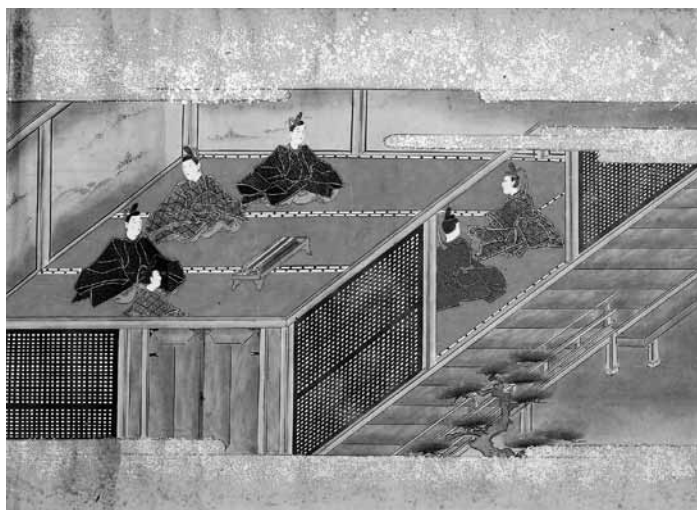
【図23】〔卷二／八〕



【図24】〔卷三／一〕



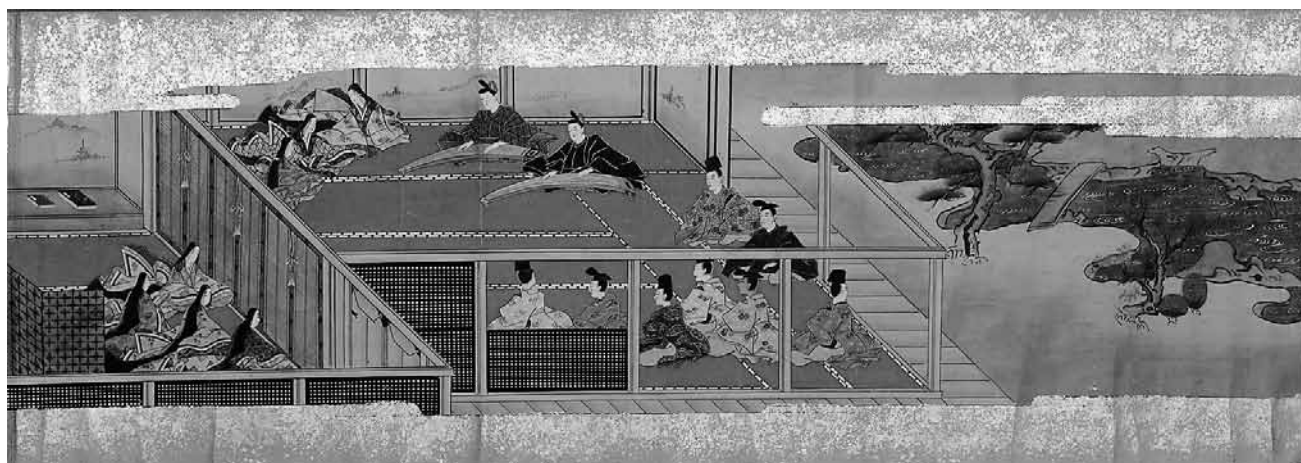
【図25】〔卷三／二〕



【図26】〔卷一／七〕



【図27】〔卷二／一〕



【図28】〔卷二／二〕